

私の日本近代史研究回顧

松尾 尊 兌

本日は読史会創立百周年記念大会で講演の機会を与えられ光栄に存じます。私は読史会あるいは国史研究室の中心メンバーであったことはありません。つまり大学院の学生でも教員でもありません。しかし人文科学研究所さらには文学部現代史研究室の教員として、国史の特殊講義や演習を担当してきました。そういう中心から少し離れた立場の話としてお聞き下さい。まずはじめに私の研究のあゆみをざっとお話しして、そのあと、研究を可能にしてくれた学問的環境についてふれたいと思います。敬称は略して「さん」づけにいたします。

一 仕事のあらまし

私の研究の出発点は一九一八年の米騒動でした。これは卒論のテーマであったばかりでなく、卒業後まもなく幸運にも助手に採用された人文科学研究所の共同研究のテーマでした。井上清・渡

部徹編著『米騒動の研究』一～四巻（有斐閣、一九五九～六一一年）のうち一〇府県を担当し、ほかに総括ともいうべき、第五巻に「米騒動の取締と鎮圧」「米騒動研究のあゆみ」の二章を書いています。これと併行して渡部徹編著『京都地方労働運動史』（同編纂会、一九五九年）の大正時代の部分を担当し、それを契機に日本労働運動の主流ともいうべき、友愛会——日本労働総同盟の成立過程を調べ、普通選挙運動研究（明治・大正初期）とともに『大正デモクラシーの研究』（青木書店、一九六六年）をまとめました。私の学問的出发点が民衆運動史研究であったことは、その後の私の政治史研究に強い特色を与えています。多くの政治史研究者が藩閥とか政党とか権力側の研究から出発しているのに対して、私の場合は民衆の側から、地方の側から歴史を構成する姿勢がつきまとうのです。

私の政治史研究は一九六〇年安保闘争に触発されて書いた、日

本史研究会大会報告「大正デモクラシー期の政治過程——普通選挙問題を中心に——」（『日本史研究』53、一九六一年）に始まります。これをさらにふくらませて『岩波講座 日本歴史』（一九六三年）に書いた「政党政治の発展」は前記の姿勢とともに、それまでの政治史の藩閥勢力対政党勢力の抗争の構図に対し、帝国主義権力対政治的自由を求める民衆勢力の視点を打出したものです。『民本主義の潮流』（文英堂版『国民の歴史』（21）、一九七〇年）、『大正デモクラシー』（岩波書店、一九七四年）、『普通選挙制度成立史の研究』（岩波書店、一九八九年）はその延長線上の仕事です。

一九七一年に人文研から文学部の現代史教室に移ったあと、戦後史を手がけました。現代史担当という手前と、岩波講座日本歴史（戦後第二次）の近現代担当の編集委員になったことがきっかけです。四人の編集委員の間では、戦後史研究を促進するため四人とも執筆に参加しようという申合せができました（実行しなかった人もいました）。『旧支配体制の解体』と題する講座論文を出发点として、『国際国家への出発』（集英社版『日本の歴史』21、一九九三年）と『戦後日本への出発』（岩波書店、二〇〇二年）の二冊をまとめました。

このほか主として大正期に活躍した人の思想と行動について幾

つかの論文を書きました。人の思想は著作だけではわからない。行動にこそ思想が現われるというのが私の立場です。『大正デモクラシーの群像』（岩波書店、一九九〇年）『大正時代の先行者たち』（岩波書店、一九九三年）『民本主義と帝国主義』（みすず書房、一九九八年）『わが近代日本人物誌』（岩波書店、二〇一〇年）がその所産です。

二 国史研究室の伝統

次に私の学問を育ててくれた環境について語ります。第一は京大の国史研究室についてです。私は新制大学卒業の研究者に比べれば研究室になじみが薄いのです。旧制の大学院には籍を置きましたが、それは図書館利用と国鉄の学生割引利用のためでした。それも六ヶ月間だけで、人文研の助手に採用されますと、退学させられました。教官は学生を兼ねることができないという理由です。したがって研究室にいたのは学部の三年間だけです。きわめて自由にすごすことができました。卒論で米騒動という物騒なテーマを選んでも、やめておけという声はどこからもありませんでした。当時は戦後民主主義の空気の中で、あたり前のことだと思っていました。実はそれだけではなく、京大の伝統たる自由の学風が国史研究室にも及んでいたと解すべきだと今日では考え

ています。

ついでに申せば、私が国史の授業担当をはじめて委嘱されたのは一九六六年のことですが、小葉田淳教授の注文は「君の一番得意なところをやって下さい」の一言だけでした。他教室では必ずしも同様でなかったことも知っています。

東京大学の国史学科では、五十年以内の歴史、すなわち現代史は卒論の対象としては不適当だという不文律が、戦後もしばらくは存在していたようです。これを犯すと就職の世話をしてもらえなかったり、一九五六年の下村富士男助教教授着任までは新制の大学院に入れなかったりという状況が続いたとのこと。これは私より一年後に東大国史を卒業した一友人から聞きました。その不文律の根拠は、戦前における日本史の標準テキストとされた東大教授黒板勝美『更訂国史の研究』総説篇（岩波書店、一九三一年）に記されています（三五七ページ）。

こゝに一言したきは、最近世及び現代といはれてゐる時代をこゝに入れては置いたが、その研究は史料等の関係から大に困難であることを知らねばならない。専門的にいへば五十年以内を歴史として取扱ふべきや否やは論議せられ得べきものであつて、活動した人々が猶ほ生存してゐるものも少くない

し、資料の如何によつては之を公にすることが、その人々の利害に関係を有するのみならず、外交や軍事や国家の休戚にも影響及ぼすことがあるのであるから、之を秘密に附せねばならぬものも多いであらう。従つて多く表面に現れた事柄のみによつて、之を叙述し論評し得るに過ぎないから、その真相を捉へて公平なる批判を下すことは甚だ困難といはねばならない。それに歴史家としても、現在直接に国家の利害等に関係ある史実を暴露するが如き挙動に出で、自ら快とするは固より國民としてよく忍んで為し得らるべきことではない。されど最近世史の必要なことも政治家、実業家はた教育家等にも痛感せられてゐるから出来得るだけ現在の諸問題に史的研究を加へその成果を発表するにはまた国史を研究するもの、任務であらう。

簡単に申せば、資料が少ない上に、国家的利益をそこないかないということでしょう。ただし黒板さんはいかにも羽仁五郎さんの庇護者であつた人らしく、現代史研究を否定しているのではないことは、おわりの部分でよくわかりますが、未熟な学生の卒業では扱うべきでないとの立場をとつていたと思われれます。

ところが京大国史ではむしろ現代史研究尊重の気風が三浦周行

先生が読史会を創められたときから存在していました。三浦さんの学風については朝尾直弘さんが次のように的確にとらえています(三浦『国史上の社会問題』岩波文庫版、一九九〇年、の解説)。

著者は現実社会の動向に無関心ではおれないたちの史家であった。しかも自分の研究成果をできるだけ早く社会に公表し、「社会の諒解と批判とを求」めることによって、社会と学問(史学)とのそれぞれ健全な発達に資することができると思じた史家であった(『日本史の研究』第一輯自序)。

この学風が初期の読史会には色濃く反映しています。一九一一年二月二日の第二回大会のテーマは「国史上より見たる支那動乱」で、明らかに辛亥革命を意識しています。一九一四年三月三日例会では三浦さん自らが「近時政界の史的批判」を行っていません。大正政変の最中シーメンス事件で山本権兵衛内閣が三月二四日に倒れる直前です。一九一八・一九の両年度の大会テーマは連続して「国史上の社会問題」です。一九二六年大会のテーマは明治史でした。一九三〇年一月に発行された「読史会二十年史」で西田直二郎さんは、「時局と歴史研究、時事問題の歴史的

立場の批判が読史会大会なるものに於て特に發揮された」と記しています。

現代史への関心の強さは国史研究室だけではなく、史学科共通であったようです。西洋史では中世史の原勝郎さんが『世界大戦史』(同文館、一九二五年)を著し、東洋史では内藤湖南さんの『支那論』(文会堂書店、一九一四年)あり、講座数の多かった東洋史では矢野仁一さんが清末以来の外交史を担当していました。国史研究室の近代史への関心の強さが、どの程度卒業論文に反映されているか。各年度の卒論で近代(幕末明治維新时期以降)を主題しているものの数を調べたのが次の表です。

残念なことに卒論がすべては保存されていないので、近代史関係論文数の正確なことは不明ですが、大体の傾向はわかります。東大の場合と比べるとできないのが残念です。一九二四年すなわち大正末年まで、近代関係卒論は皆無のようです。昭和初年にかんがりの数がみられるのはマルクス主義の興隆と「明治文化全集」の刊行の直接・間接の影響でしょう。戦時下も細々ながら近代関係卒論の提出が続いています。敗戦直後の時期は意外にもさほど数はふえていません。のち著名な近代史家になる岩井忠熊さんは近世の宇和島藩、白井勝美さん(ともに一九四八年卒)は鎌倉期の宮廷、山本四郎さん(一九四九年卒)は江戸中期以降の西

卒業年次	卒論総数	近代史関係	卒業年次	卒論総数	近代史関係
1910	7	0	1934	17	2
1911	1	0	1935	21	3
1912	4	0	1936	16	1
1913	2	0	1937	20	2
1914	2	0	1938	28	2
1915	2	0	1939	20	3
1916	1	0	1940	18	2
1917	2	0	1941	15	3
1918	5	0	1942	14	2
1919	2	0	1943	16	1
1920	1	0	1944	14	0
1921	1	0	1945	3	0
1922	1	0	1946	10	0
1923	2	0	1947	10	1
1924	2	0	1948	32	4
1925	3	3	1949	40	3
1926	3	0	1950	21	3
1927	7	1	1951	8	0
1928	9	1	1952	9	2
1929	7	4	1953	8	4
1930	24	0	1953(新)	9	1
1931	15	0	1954	7	1
1932	18	1	1955	11	5
1933	16	0	1956	15	4

洋文化受容を主題としています。卒論中近代関係がかなりの割合を占めるのは一九五二年からのようです。私の「一九一八年米騒動」以前の新しい時期を扱ったものとしては、片岡友治「明治時代に於ける社会問題としての労働運動に就て」（一九四九年）、松原真理子「福田英子の社会的自覚的と実践」（一九五〇年）があります。松原さんと同期の藤原剛さん（毎日新聞記者）は卒論が残っていませんが、日本ファシズム関連であることに間違いはありません。

ただし歴史研究者が現代に関心を抱く場合、その現代をどういう方向に導こうとしたのかが問われねばなりません。三浦先生の場合「内に立憲主義、外に帝国主義」という、日露戦争後の大正デモクラシー初期段階の色彩が濃いようです。三浦さんは第一次護憲運動を「社会の進運上当然の経過」と支持されながら（『史家より観たる大正時代』一九一三年六月、三浦『現代史観』古今書院、一九二二年所収）、一方では三・一運動後も朝鮮の同化政策を支持し

たり「朝鮮は同化すべきか」一九二二年七月、三浦『現代史観』、また政權掌握直前のムツソーニと会見し、その暴力的な傾向に疑問を呈しながらも「愛国的熱情」に共鳴したりしています（「ムツソーニ氏と語る」一九二二年六月、三浦『欧米觀察 過去より現代へ』内外出版、一九二六年）。

三浦さんが九月六日に逝去された直後に満州事変が勃発し、十五年戦争の時代に入りますが、読史会の現代に対する関心は戦争協力と反対とに二分化されます。もちろん反対派が圧倒的に少数派であったのですが、その代表的人物が清水三男さんであったことはいまでもありません。他方、奇しくも協力派の筆頭になったのが、清水氏と同じ一九三二年二月卒業の吉田三郎さんでした。私の知る限りおそらく西田直二郎教授の引きでしょうが、一九三四年に国民精神文化研究所の助手になり、一九四〇年にはその正式所員に昇任します。太平洋戦争開始の年には京大国史の講師に招かれます。翌年興亜練成所練成官に移り、国民精神文化研究所の方は兼官となります（以上『職員録』各年度）。清水さんに先立って、一九四五年六月に逝去されていますが戦死かどうか死因は不明です。

吉田さんには『日本建設史論』（世界創造社、一九三九年）、『思想戦』（国民精神文化研究所、一九四一年）、『米国の野望を

撃つ』（講談社、一九四一年）の三冊の単著があります。これまでの日本史は欧米史学の影響下にある「植民地人」の作であり、これを総否定して「わが国体・国民精神の原理を闡明し、国民文化を啓発し、外来思想を批判し、マルキシズムに対抗するに足る理論体系」を建設することを目指しています。清水三男さんについてはその業績と人柄については多くの人が語っていますが、吉田さんについてはまったく調べられていません。北山茂夫「日本近代史学の発展」（岩波講座『日本歴史』別巻1、一九六八年）が京大卒業直後の仕事に簡単に言及しているようです。^①西田教授がその主著『日本文化史序説』の趣旨を否定する吉田さんを下して国史の講師に招いたのか。そういう問題もふくめて、戦時下の読史会には究明すべき問題が多く残されています。

三 師 匠 た ち

まずあげねばならぬのは北山茂夫さんです。日本古代史研究で多くの業績のあることは周知のとおりです。同じ羽仁五郎門下の松江の藤原治さんのすすめでうかがったのですが、お宅が下宿の近所だったので、入学早々からよく訪れました。高校生気分です手にだべりに行くので、北山さんはねを上げて、学問上の話なら相手になるが、そうでなければ来るなといわれました。それで引

下がらずに学問上の話題をこしらえておしかけ、先生根負けの形で内弟子同然となり、一九八四年はじめての没時にいたりしました。

私は京大に入ったときは中世史を勉強するつもりでしたが、現代史に転向したのは北山さんのすすめにしたがったからです。三〇年以上にわたり、私の文章は原稿の段階で読んでいただき、的確な注意を受けました。先生はあとでお話する井上清さん同様、通史の書ける史家でしたから、それが可能だったのです。読書の指南も受けました。私が中野重治氏に接近し、『中野重治訪問記』（岩波書店、一九九九年）といった本を書くにいたったのも、北山さんが中野さんと親交があったからです。

人生百般にわたり相談にのってもらいました。一九七一年、私が人文研から紛争渦中の文学部に移るときも、尻を叩くように勧められました。大学は学生あつての大学だ。学生と取組み合わないでは教師の学問は伸びない。たしかにその通りでした。文学部に移ってから私は一度も実家の人文研に舞戻りたいと思ったことはありません。

次に井上清さん。私が一九一八年の米騒動を卒論の対象としたのは京大入学早々手伝った羽仁五郎さんの参議院議員選挙で、事務長の井上さんにすすめられたからです。私が人文研助手に採用された次の年の一九五四年に助教として着任され、一六年間常

に共同研究班長として指導を受けました。所外の活動（講演その他）で多忙のためか、よく研究会で居限りされていましたが、報告が終った途端に眼を覚し、的確な質問や意見をのべられるのに驚かされました。マルキストでしたが、発想はきわめて自由柔軟で、著書論文よりも研究班での談論に学ぶことが多くありました。「歴史学は有難い学問だ。歴史的事実という共通の土俵で勝負することができるから」という言葉が耳に残っています。

当時でも研究所員が各学部の授業を担当するのが一般的でしたが、札付きのマルキストを警戒して、文学部教授会は井上さんを授業担当に招き入れませんでした。私は当時の貝塚茂樹研究所長にたのまれて国史研究室の院生に、文学部と人文研との関係がまぶくなるから、井上さんの招聘運動を起さぬようにと説得に行きました。

ところが井上さんが自宅でレーニン全集の読書会を開かれると、国史の卒業生と院生がこれに参加し、あたかも国史の井上ゼミの観を呈しました。中塚明・江口圭一・松浦玲・岩村登志夫・里上龍平・芝原拓自・鈴木良・安丸良夫・佐々木隆爾・広田昌希、ほかに同志社の山本明・君村昌両君も加わりました。その後日本近代史研究の第一線に立ち大きな足跡を残した人たちがこのゼミで育ったのです。

レーニン読書会では井上さんの方針で『ロシアにおける資本主義の発達』とか『国家と革命』とか有名な著作ではなく、一九〇五年から一九一七年にかけての、つまり二つのロシア革命の間の、レーニンの政治小論文を読むことに終始しました。そこで私は社会主義革命の前提としての帝国主義に対する民主主義闘争の重要性を学び、これを手がかりとして普通選挙をふくむ政治的自由の問題を軸とする大正デモクラシー史像の構築を試みたのです。レーニン読書会のメンバーはすなわち日本史研究会近代史部会の主力メンバーであり、ここでの討論を経て一九六〇年秋の日本史研究会大会で「大正デモクラシーの政治過程」(『日本史研究』、一九六一年)を報告しました。これが私の社会運動史から政治史への転進の始まりです。

最後に渡部徹さん。私に人文研が助手を公募するので受けてみないかとすすめて下さったのが渡部さんでした。私は当時京都府立図書館の臨時職員で、本採用になるのを目指していたので、たまたま先生の部屋に訪れなかったら助手公募の件は知らずに終わることでしょう。卒論を書くとき資料を拝借にうかがった縁です。経済学部の社会政策ゼミに顔を出していた岸本英太郎教授の紹介だったでしょう。

渡部さんは井上班の事務局長でした。井上班が次々と大部の研

究報告書を公開できたのは先生の実務家的手腕によるところが大きかったです。渡部さんに米騒動研究班とは別に朝田善之助氏と組んで『京都地方労働運動史』(一九五九年刊)を編集されました。これはその後の日本各地域の労働運動史編集の模範となりました。特色はまだ生存中の運動家約一〇〇人から聞き取りを行ったことです。近頃オーラルヒストリーという手法が問題となっていますが、半世紀も前に渡部先生は実行されたのです。私は二年間くらい休日返上で聞き取りに行きました。高山義三・辻井民之助・水谷長三郎・谷口善太郎などの名士がまだ健在でした。聞き取りの技術を身につけただけではありません。私は大正時代を担当したのですが、この作業の中で友愛会や普通選挙運動という研究テーマをつかんだのです。

四 京都と東京

レーニン読書会の仲間に師岡佑行、馬原鉄男、秋定嘉和君ら立命勢を加えたのが日本史研究会近代史部会のメンバーでした。日本史研究会は東京の歴史学研究会と密接な関係をもっていました。その支部ではありませんでした。共に共産党の影響下にありましたが、東京と京都の距離に起因する差がありました。近代史研究には資料収集の点では圧倒的に東京が有利です。国会図書館、

東大明治文庫・新聞研究所、大原社会問題研究所などすべて東京一極集中です。しかし東京は政治の中心であり、研究者はモロに政治の影響を受けます。共産党内の抗争は直接歴史学研究会に影響しました。もし私が東京の大学に進んだならばもみ苦茶にされたことでしょう。

資料の収集は年に何回か上京することで可能です。京都は東京から遠からず近からず、ほどよい距離にあることが、私の近代史研究に有利に働きました。もちろん現在は共産党の歴史学界への影響力はおとろえています。しかし東京はいぜん政治の中心地であり、学界の動向も東京に左右されがちという事情は変わりありません。京都が東京からほどよい距離にあることの有利さは、現在も続いていると思います。

資料収集の不便さをつくなくなってくれたもう一つの点は、東京にすぐれた先輩や友人たちを持ったことです。藤原彰さんは井上門下で一九五四年に米騒動資料を東京から運び込んで下さったとき以来、親しくなりました。以来一九七四年までの二〇年間、東京での常宿は藤原邸でした。藤原さんを介して今井清一、犬丸義一、宇野俊一、神田文人、由井正臣、古屋哲夫、栗屋憲太郎氏らを知りました。松沢弘陽君は鳥取一中いらいの友人です。一年終了のころ父君の転勤で宇都宮に移り、戦争末期に音信不通となりました

たが、一九五六年になって東大法学部の院生として丸山眞男研究室に所属していることがわかり、その翌年に日本政治学会が大阪であったとき再会したのです。その折藤田省三君に引合わせました。私が丸山眞男さんに親近することができたのも、松沢、藤田両君を介してです。両君はともに丸山さんの後継者と目された人ですが、京都で孤立しがちな私はマルキストになり切れず、また理論家でもありません―私を遠くからはげましてくれたのはこの両君でした。

本日は、私がこれまでいくらかの仕事をやれた要因として、第一に読史会の歴史が示す研究の自由と現代への関心の強さに助けられたこと、第二に京大人文研時代にすぐれた先生と友人に恵まれたこと、第三に京都という東京からほどよい距離にある場所であらう、東京にもありがたい先輩や友人をもちえたこと、以上について申しのべました。ご静聴に感謝します。

① 小論脱稿後、吉田さんの皇国史観の特色に一章を割いた昆野伸幸『近代日本の国体論』（ベリかん社、二〇〇八年）のあることを教えられた。「吉田三郎の〈皇国史観〉批判」『日本思想史研究』33、二〇〇一年）および「皇国史観」考」（『年報日本現代史』12、二〇〇七年）の二論文を再構成した力作である。興南練成院練成官として赴任先のフィリピンでの戦死も記されている。